

北海道の博物館の現況についての調査（I）

On the Present Situation of the Museums in Hokkaido (I)

片 桐 宏 理

Hiroaki KATAGIRI

1. はじめに

筆者は北海道の一私立大学において教務関係業務に携わる者としての観点から、大学における学芸員養成課程とそれを取り巻く状況のより総合的な把握と理解に努めてきた。「札幌商科大学における学芸員課程の設置と今後の課題」^{注1}においては、一大学の課程設置にいたるプロセスを追尋することによって、博物館に関する社会的、時代的な需要・供給のバランスの変化が、その背景に存在したことが明らかになった。また、「北海道の私立大学生の学芸員課程にたいする意識調査をめぐって」^{注2}においては、主に、学芸員資格取得をめざす学生の学芸員という職種に対する意識と関心の度合いを調査することにより、学芸員課程の現状把握の一助とした。

さて、今回学芸員課程にかかわる諸問題のより正確な把握と理解を目指すという観点から、筆者等は道内各種博物館の現況を把握するためのアンケート形式による調査を実施した。本稿はその調査と分析にもとづいて、学芸員課程をめぐる社会的諸条件の理解を深めようとするものである。

なお、調査項目（設問）数は32項目、主題別分類では次項に述べるように6項目にわたっているため、2部に分載することにした。本稿はその第1部であることを予めお断りしておきたい。

2. 調査内容

今回の調査にあたっては『北海道博物館ガイド』（編者北海道博物館協会昭和60年3月発行）に採録されているものを中心に、動・植物園、水族館、美術館以外を対象として実施した。実施時期は昭和61年5月から7月である。

対象館235館、回収数162館、回収率68.9%、有効回答数160である。アンケートの設問32問であるが、それは

以下のように6群に大別される。

- I. 設立に関する設問
- II. 運営形態に関する設問
- III. 組織に関する設問
- IV. 施設に関する設問
- V. 業務に関する設問
- VI. その他

以下、I, II, III, IV, V, VIと表記する場合には前記の分類に従っているものとする。

なお、本稿では既述のとおり、今回を第1部とし、内容項目I～IIIを、次回第2部においてIV～VIを主な内容とする。

3. 調査結果

調査結果は、各設問に対する回答を図表ないし一覧表で示すこととした。

I. 設立に関する設問

表1. 設置区分

区分	館数	%
国立	4	2.5
道立	2	1.3
市立	43	26.9
町立	87	54.4
村立	5	3.1
その他	19	11.9
計	160	100.1

表2. 開設年

年 間	館数	%
明治年間	1	0.6
大正年間	1	0.6
昭和年間	158	98.7
計	160	99.9

表3. 昭和の内訳

区 分	館	%
昭和元年～9年	0	0.0
10～19	2	1.3
20～29	2	1.3
30～39	11	7.0
40～49	37	23.4
50～59	101	63.9
60以降	3	1.9
不 明	2	1.3
計	158	100.1

* かたぎりひろあき
札幌学院大学

連絡先(勤)札幌学院大学江別市文京台11番地
TEL 011-386-8111

設置区分では、町立が圧倒的に多く、50%を越えている。国立の4館は、全て環境庁によるビジターセンターである、一般の博物館をイメージできるものではない。開設年では、明治・大正時代の開設が各1館である他は全て昭和である。しかも昭和50年～59年の間に101館(63.9%)が集中していることは注目される。^{注4}「我が国博物館の運営・施設の基礎的現状分析」によれば、1971～1981年は全国の博物館の急増期と指摘されている。北海道の場合も、全国的な趨勢に一致しているものと思われる。また、この背景には北海道の政策レベルでの文化振興へ

表4. 博物館の種類

館の種類	館数	%
総合博物館	52	32.5
考古	5	3.1
歴史	23	14.4
民俗	9	5.6
科学	10	6.3
その他	57	35.6
無回答	4	2.5
計	160	100

表6. 立地条件

立地条件	館数	%
市町村の中心地に在る	60	37.5
中心地よりやや離れている	65	40.6
郊外に在る	30	18.8
その他	4	2.5
無回答	1	0.6
計	160	100

表5. 所在地

支庁	館数	%	内						訳
			国立	道立	市立	町立	村立	その他	
渡島	14	8.8	0	1	4	8	0	1	
桧山	9	5.6	0	0	0	9	0	0	
胆振	12	7.5	0	0	5	5	0	2	
後志	12	7.5	0	0	4	6	2	0	
石狩	20	12.5	2	1	11	2	0	4	
空知	15	9.4	0	0	7	8	0	0	
上川	19	11.9	0	0	5	9	0	5	
日高	7	4.4	0	0	0	7	0	0	
留萌	6	3.8	0	0	0	6	0	0	
宗谷	5	3.1	0	0	0	4	0	1	
網走	17	10.6	0	0	3	11	2	1	
十勝	10	6.3	0	0	0	7	2	1	
釧路	10	6.3	1	0	2	4	1	2	
根室	4	2.5	1	0	1	2	0	0	
計	160	100.2	4	2	42	88	7	17	

の関心の高まりもあった。^{注5}
開設趣旨に関しては、町立が多いためか郷土博物館に代表される比較的狭い地域における文化財保護、民俗資料収集などを目的とするものが多い他、自然環境の保全と理解を目指すもの、アイヌ文化への理解を目指すものなどが見られる。また設置に際して、北海道開拓100年記念事業を始めとして、何らかの記念事業の一環として構想されたものも比較的多い。

Ⅱ 運営形態に関する設問

図1. 開館時間

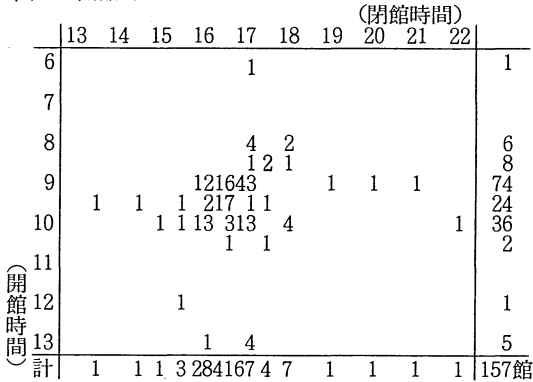


図2. 開館時間の変更

冬季時間	緑り下げ時間幅	30分	7
開館時間を緑り下げる館		60	2
閉館時間を緑り上げる館		150	1
閉館時間を緑り下げ	緑り上げ時間幅	30分	4
開館時間を緑り上げる館		60	6
15館			

表7. 休館日

定期休館日	有り	無し	不明	開館日指定
館数	132	15	8	5

表8. 有りの内訳

内訳	館数
毎週特定曜日1日のみ	65
毎週特定曜日複数日	7
毎週特定日と祝祭日 或いは祝祭日の翌日	58
毎月特定日	1
年間特定日	1

表9. 毎週特定曜日1日のみ（65館の内訳）

曜日	月	火	水	木	金	日
館	45	6	4	1	1	8

表10. 入館料

内訳	館数	%
有料	72	45.0
無料	81	50.6
不明	7	4.4
	160	100

表11. 団体割引館内訳

割引率	館数
4%引き	1
10% "	6
14% "	1
17% "	2
20% "	38
25%～54%	16
不明	1

図3. 有料の内訳

	大人	大学生	高校生	中学生	小学生
10円			2	2	2
20	1	2		2	2
30		4	4	4	5
40				1	1
50	5	2	3	26	28
60			1		
70				3	2
80		1	1	1	1
90				1	1
100	24	25	28	19	21
120			1		
150	5	6	9	5	4
200	17	17	11	3	2
250	2	2	2		
300	10	6	4	2	
350	2	1			
400	2	2	3		1
500	2	2	1	2	2
700		1	1		
800	1	1	1	1	
1000	1				
	72	72	72	72	72

** 小学生と中学生は50円か100円，高校生以上は100円か200円に集中する。

表12. 来館者数（回答147館）

年度	入館者数	増減%
昭和56年	3,165,897	
57年	3,610,998	+14.1
58年	4,282,412	+18.6
59年	4,532,404	+5.8
60年	4,846,775	+6.9

表13. 昭和56年度以降の新設館を除いた91館の来館者数

年度	入館者数	増減%
昭和56年	2,749,936	
57年	2,738,230	-0.4
58年	3,074,691	+12.3
59年	2,837,398	-7.7
60年	2,878,664	+1.5

※ 館数91は56～60年の5年間の来館者数の明らかな館。

表14. 昭和56年度以降の新設29館の来館者数

年度	入館者数	増減%
昭和58年	1,308,577	
59年	730,797	-4.4
60年	795,801	+8.9

※ 館数29は58～60年の3年間の来館者数の明らかな館。

表15. 来館者増・減館

（最近3年間に明らかに増加・減少傾向にある館）

増・減	館数
減少館	45
増加館	21
横這い・傾向不明	81

種類は総合が32.5%と一番多く，その他が35.6%で続く。以下は歴史，科学，民俗，考古の順である。今回のアンケートでは種類に関する選択肢の分類基準を設けずに実施した結果，専門館以外については極めて多様な捉え方があることが判明した。例えば総合博物館の基準であり，また歴史博物館と民俗博物館の違い等である。その他の中では，郷土館（博物館）というものが最も多く，次いで歴史・民俗，或いは歴史・民俗・科学等「総合とは言えないが，その地域に関する複数の分野を盛り込んでいる」という趣旨で分類されたものが多い。今回の調査結果を参考にして，次回分類基準を作成する予定である。

所在地を支庁別に見ると，ほぼ人口に比例して博物館の数も多くなっている事が窺われる。また石狩支庁の75%（15）館が札幌にあることが注目される。立地条件とし

ては、40.6%が中心地よりやや離れたところに位置し、37.5%が市町村の中心部にある。

開館時間は9時から5時までが一番多く、以下9時30分から4時30分まで、9時から4時30分までとなっている。また冬季には開館・閉館時間を変更するところが15館あり、冬季休館を実施しているところが35館ある。この冬季休館は11月上旬から4月下旬までが最も多く、15館42.9%を数える。

休館日は毎週特定日1日のみとする館が多く65館あり、そのうち月曜日を当てるのが45館69.2%である。また特定日と祝祭日あるいは祝祭日の翌日を休館日とする58館の殆どが月曜日を絡めている。したがって、月曜日が休館日となる館は80%に近い。

入館料は有料が45%、無料が50.6%であり、有料館の

うち90%が団体割引制度を有している。料金では大人、大学生、高校生100円とする館が36%と一番多く、中学生、小学生では50円が38%と一番多くなっている。

入館者数に関しては、全体では微増傾向にあるが、表示した56年度以降の新設館を除いた91館の来館者数、56年度以降の新設29館の来館者数で見ると、いずれも59年度に落ち込んでいる。したがって全体の微増傾向の要因は新設館にあることが理解できる。また、過去3年間で来館者数が減少している館が28%(45)館あり、網走・釧路・渡島支庁などでこの傾向が強い。逆に増加を示す館は桧山・留萌支庁・石狩支庁などにあり、13%(21)館となっている。

Ⅲ. 組織に関する設問

表16. 職 員 数

館長の区分

区 分	館数	%
常 勤	57	35.6
常勤兼務	3	1.9
兼 務	8	5.0
非 常 勤	65	40.6
無 し	13	8.1
無 回 答	14	8.8
計	160	100

表17. 学 芸 員 数

人 数	館数	%
0 人	99	61.3
1	41	25.6
2	7	4.4
3	6	3.8
4	2	1.3
5	0	
6	1	0.6
7	1	0.6
27	1	0.6
無 回 答	2	1.3
計	160	99.5

表18. 学芸員の年令構成と区分

年令	人数（常勤・非常勤）	%
20 歳 台	13人（12・1）	10.7
30	63（62・1）	52.1
40	27（24・3）	22.3
50	14（13・1）	11.6
60	3（2・1）	2.5
不明	1	0.8

表19. 学芸員補数と区分

常 勤		非 常 勤	
人数	館数	人数	館数
0 人	149	0 人	151
1	3	1	6
2	1	2	1
3	2		
4	1		
5	1		
11	1		
不明	2	不明	2
計	160		160

表20. 事務員数と区分

常 勤		非 常 勤	
人数	館数	人数	館数
0 人	89	0 人	130
1	25	1	11
2	19	2	8
3	10	3	6
4	8	4	1
5	2	5	1
6	2	24	1
7	1		
10	1		
11	1		
不明	2	不明	2
計	160		160

表21. その他の職員数

常 勤		非 常 勤	
人数	館数	人数	館数
0人	98	0人	122
1	29	1	21
2	17	2	7
3	6	3	3
4	2	4	1
5	2	5	3
8	1	18	1
11	2		
13	1		
不明	2	不明	2
計	160		160

館長については、いると答えたのは83.1%と高いが、その内訳は非常勤が40.6%、常勤が35.6%、兼務が5.0%、常勤兼務が1.9%である。全体として非常勤の比率が高い傾向にある。

学芸員数については、いないと答えた館が全体の61.3%であった。残り、すなわち約40%弱の館は学芸員を配置しているが、そのうちの半数近い41館が辛うじて1名にすぎず、2名以上の館は極めて少ない。近年、道市町村の政策レベルでは文化振興への強い意識が窺われるにもかかわらず、人的条件整備には至っていないようである。また、非常勤の学芸員も全体で7名でしかない。

学芸員の年齢構成では30代が多く52.1%、40代23.3%、20代10.7%と続いている。これは勿論、博物館開設の波動に対応している。常勤・非常勤を含め、学芸員補を配置している館数の比率は10%である。これは短大等の養成機関が全国的に少ないというよりも、学芸員を含めた博物館業務が等閑視されていることを示していると考えられる。

事務職員では、常勤ゼロの館が55.6%と半数以上を占めているため、結果として非常勤に依存することになるはずだが、奇妙なことに非常勤を置く館はまた極端に少ないのである(18%)。学芸員あるいは館長等が兼務している可能性がある。

その他の職員（ボイラーマン等）については、61.2%がゼロ、いると答えたのは38%である。また、非常勤を置くところは23.7%である。全体的に言えば、学芸員以外の職員の非常勤依存度がきわめて高い。以上関連して職員の充足性では、不足が66.3%と高い。そのうち70.7%は学芸員不足、37.7%は事務職員不足を訴えている。

4. むすびに代えて

今回の調査の主眼は既に述べたように、北海道の博物館の現況をより正確に、より多面的に把握することを目指したものである。本稿では、その全体6項目のうち半分を紹介するとともに、若干のコメントを加えてみた。次稿においてもこの体裁を採り、調査結果とコメントを報告という形で紹介する予定である。

最後になったが、今回の調査は札幌学院大学学芸員課程で実施したものであり、同課程の責任者鶴丸俊明助教授の全面的な助言と指導を賜ったことを特記して感謝の意に代えたい。

- 注1. 片桐宏理「札幌商科大学における学芸員課程の設置と今後の課題」『博物館学雑誌第9巻第1号・第2号合併号』1984年3月全日本博物館学会発行P.40.41。
- 注2. 片桐宏理「北海道の私立大学生の学芸員課程に対する意識調査をめぐって」『博物館学雑誌第11巻第1号』1985年11月全日本博物館学会発行P.42。
- 注3. 比率は四捨五入して小数点以下一桁で示したため、合計は100%にならない。
- 注4. 野村東太、池田千春、柳沼良一「我が国博物館の運営・施設の基礎的現状分析」『博物館学雑誌第11巻第1号』1985年11月全日本博物館学会発行P.6。
- 注5. 前掲稿「札幌商科大学における学芸員課程の設置と今後の課題」参照。